

## 心臓突然死予知における製品最前線 ～ 心電計・ホルター ～

フクダ電子株式会社 心電営業部  
打田博則

2012年4月、診療報酬の改定にて2つの心電図検査が新設された。①加算平均心電図による心室遅延電位（レートポテンシャル：LP）200点と、②T波オルタナンス検査（TWA）1,100点である。このLPとTWAは“心臓突然死”の予知指標であり、日本循環器学会のガイドラインの中でも臨床的有用性が高いパラメータとして記載されている。しかし、これらの検査はそれまで診療報酬の適応ではなかったことなどにより限られた施設でのみ行われてきたため、広く知られていないのが現状である。そこで今回は、これらのパラメータがどういったものであるかということから、どのような検査機器を用いて検査をし、どのように活用していくかなどを概説したい。

また最近では、LPやTWAを含めたその他いくつかの心臓突然死予知パラメータがホルター心電図データから計測ができるようになってきている。例えば、従来からあるQT dispersionや心拍変動（HRV）の計測に加え、HRT（心拍タービュランス）やBrugada計測などである。したがって現在では、1度のホルター心電図検査から最大で6つの心臓突然死予知パラメータが得られるようになってきている。これまではあるパラメータ

を計測しようと思った場合、それを計測するための検査機器を用いて、それ専用の検査をしなければならなかったのが、今ではホルター心電図検査からひと通りのパラメータが得られるようになったのである。ただしホルターから得られるTWAの結果は特に、まだエビデンスの確立には至っておらず、現段階では研究用途としての活用にとどまり今後、有用性が明らかになることが期待されている。

Brugada型心電図の解析においては、近年の心電計では通常的心電図解析に加え、特異的な心電図異常の出やすい高位肋間の心電図を合成波形にて作り出すことで、Brugada型心電図の予測をしている。通常の12誘導心電図検査をするだけでBrugada型心電図の可能性を示すため、その後、実際の高位肋間の心電図を取ってチェックすることができる。Brugada症候群は心臓突然死に関連があるため見落としは絶対に避けたいものの、全症例で電極位置を付け替えて検査をするのでは効率が悪過ぎる。手間なく、異常の可能性を示すことで検査をナビゲートするともいえる機能を搭載した心電計も登場してきている。

連絡先：03-3815-2121（代）